

協定留学体験記

- 留学先 : 国立政治大学（台湾）
- 留学期間（実際の現地滞在期間）：2022年9月～2023年6月
- 学部・学科 : 人文学部日本・東アジア文化学科
- 留学時の学年：3年

留学するにあたって掲げた目標は「自信のある自分へ成長すること」である。留学生活においてこの目標を特に意識していたわけではないが、振り返ってみると、図らずも達成できているような気がしている。「自信」というぼんやりとしたものは、主に現地での学びと人との関わりという二つの要因から得られたのではないと思う。

学習面では中国語の習得よりも、自分の興味関心に沿った文学の授業を受けることに重点を置いた。後期に履修した「哲学と文学」という授業は途中で履修をやめようかと思ったほど辛く、特に印象に残っている。しかし、内容が魅力的なことで、そして何より初回の授業時に三島が好きだと言っていたマカオの留学生とどうしても友達になりたかったことが私を居座わらせた。英語での抽象的な議論に苦戦したが、結局私にとって忘れられない契機となるような授業になった。アカデミックな議論を何とかこなせたというこの経験は、英語力にも自信が付いた。多少文法に誤りがあるが、積極的に発言していくことで相手にはどうにか伝わるのだということを実感できた。中国語に関しては、英語ほど授業内で使う機会はなかったが、買い物や週2回のオーケストラサークルでの時間、また台湾の友人の実家訪問の際などに必死に中国語で会話を試みて、検定のためのインプット重視の学習とは異なり、生活の中で実践的に学べたため、習得が早かった。

人との関わりに関してはかなり怖気付いていたが、10ヶ月間で互いに別れを惜しみ、帰国後も連絡を取り合うような交友関係を数人と築くことができた。自分から積極的に友達作りを意識したわけではないが、授業やサークルで出会った色々な国からの留学生と仲良くなり、次第に、この世に同じ人は面白いほど誰一人としていない、ということに気が付いた。我々はよく出身地で人の性格や考え方の傾向を捉えてしまいがちだが、たとえ同じ国の出身であっても、異なる考えや性質を持つことは当たり前のようにあることを改めて認識した。この気づきは相手をなるべくカテゴライズしまいという意識と、これほどみんな違うのだから別に無理して人に合わせることはないという前向きな諦めを私に芽生えさせた。私はもともと発言や行動をする前に周りからの反応を考えすぎる傾向にあり、結局何もしないという結果になることが多い。しかしそれはとてももったいないことであるし、誰かに認められようとせずとも、自分の思ったことを素直に表すこと自体に意味があるのだと思うようになった。寮生活でルームメイトという関係性を新たに持ったが、騒音などで度々迷惑を被った。最初は注意することを躊躇っていたが、私の唯一の休息の場の環境を妥協するわけにはいかぬと腹を決め、はじめは罪悪感や緊張感が襲ってきたが、きちんとルームメイトに不満や要望を打ち明けられるようにした。したがって、結局ありのままであることが重要だと思うに至った。思ったことを伝え、やりたいことをする。単純なことだが、私は躊躇していた。この単純さが無理のない人間関係を作ってくれるのだということを実感した。

今回の留学で、私が今まで日本で身に付けてきた語学力や教養が、ある程度の段階まで到達したということを知ることができた。また、日本以外の土地でも大切な友人に巡り会えることができた。この二つの経験は、確かに私に自信を与えてくれたと思う。しかし、これで満足せず、留学で得たことをさらに良いものにするために日々邁進していきたい。

